鈴木 博之・四郎翁姆（2018）『言語記述論集』10:13-42

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における述部に標示される証拠性*

鈴木 博之　　四郎翁姆
オスロ大学　　オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、述部、証拠性

1　はじめに

本稿では、カムチベット語 Lhagang（塔公）方言における動詞接辞によって表される証拠性の体系を、調査票による聞き取りを基本にして記述を行う。Lhagang 方言は Minyag Rabgang 方言群に属する方言[1]で、四川省甘孜州康定市塔公鎮塔公村で話される。母語話者は 500 人程度と見積もられる。

Lhagang 方言の記述研究としては、鈴木・四郎翁姆 (2016) の文法スケッチがあり、その中に本稿で主たる記述の対象となる証拠性についても触れられている。また、塔公村では、同村周辺の牧民に対する定住政策などによって移住してきた住民もおり、彼らはアムドチベット語を話すことから、頻繁な言語接触が認められ、相互に影響しあっている（Suzuki & Sonam Wangmo 2015, 2017）。本稿で扱う言語は同村で代々生活を営んできた人々が話すものである。

チベット系諸言語 (Tibetic languages[2]) は、その証拠性が多様な動詞接辞によって表現されることに特徴づけられる。チベット・ビルマ諸語の証拠性全般について述べたものに Tournadre & LaPolla (2014) があり、チベット系諸言語に特化したものとして、Gawne & Hill (eds) (2017) がその多様性を反映した各種の記述を提供している。Oisel (2017) もラサのチベット語に関する証拠性を改めて検討している。Vokurková (2008) は共通チベット語における証拠性と組み合わせて認識的モダリティーの記述を行い、その複雑な構造を提示している。しかしながら、個別言語における証拠性の記述において、枠組みが共有されておらず、どのように、そしてどのような用語を用いて記述するかは、各研究者の関心によっている部分が多い。また、動詞接辞に対する語釈のつけ方、分析の仕方にも異なりが認められる[3]。

このような状況にある中、Bettina Zeisler や Nicolas Tournadre といった研究者が、チベット系諸言語の証拠性の記述における包括的な枠組みを構築しようと試み、調査票を作成しつつあ

---

* 本稿の一部は第 68 回言語記述研究会（2015 年 12 月 26 日；京都大学）での口頭発表に基づいている。本稿の執筆・改訂に際しては、才譲三周、千田俊太郎、古本真の各氏から貴重なコメントをいただいた。ここに記して謝意を表する。

[1] 方言区分については、Suzuki (2009, 2014) 参照。

[2] Tibetic という用語については、Tournadre (2014) を参照。

[3] 付録２を参照。

る。本稿は、両者の草稿段階にある調査票（以下それぞれ「Z 調査票[4]」「T 調査票[5]」）を参考にしつつ、第 1 著者と第 2 著者（Lhagang 方言母語話者）が調査票にある現象をめぐって議論をしながら、各例文の意図する Lhagang 方言の形式を記述し、それをまとめた資料的性格の強いものである。調査票の評価や改善を目的とはしない。本稿の記述は、主として T 調査票によっている。記述を通して、証拠性の体系を記述するのにより適しているように見えるためである。

Lhagang 方言の証拠性を概観してみると、特に「向自己 (egophoric)」、「感知 (sensory)」、「情報源」について明確に標示されることが分かる。また、これらは動詞のタイプとテンス・アスペクト（以下 TA）によって異なって現れる[6]。Lhagang 方言の TA は、次のようなものが形態統語的に区別される。カッコ内は語釈に用いる。

- 未来 [意思] Future (FUT)
- 非完了 [現在/未来] Nonperfect (NPFT)
- 習慣 [陳述] Statement[7] (STA)
- 進行 Progressive (PROG)
- アオリスト Aorist (AOR)
- 完了 Perfect (PRF)

このうち、「未来」は特に「意思未来」を指す[8]。それ以外は非完了に含まれる。「アオリスト」は事柄の完了を表す点で「完了」と同等と考えてもよいが、証拠性にかかわる接辞との共起の面で、特別な制限がある。つまり、すべての語形ですべての証拠性対立が認められるわけではないことになる。詳しくは、以下の各節で述べる。また、TA の枠組みにモダリティーと証拠性が加わって、述部が成立しているものと理解できる。なお、TA と証拠性はほとんどの場合、動詞語幹に後続する位置で、接尾辞とともに表現される[9]。

---

[4] 現段階では公開されている（2016 年 6 月版）が、引用するには著者の確認が必要とのことである。本稿においては、これを参照したが、直接は引用しない。
http://tulquest.huma-num.fr/sites/default/files/questionnaires/41/QuestionnaireEvidentiality.pdf

[5] 現段階では非公開。個人的に入手したものである。

[6] チベット系諸言語の TA について扱ったものに Zeisler (2004) があるが、Lhagang 方言の記述に際しては、異なる枠組みを用いる。

[7] 語釈には「陳述」に相当する語形をあてる。習慣を表すのは他の接辞でも可能であるからである。この形態が現れるのは相当限られているため、TA の一部とみなすかどうかは再考の余地がある。
　これに関連して、1 つの問題がある。T 調査票や Oisel (2017) の記述にある証拠性の中には「無標」がない。各種述部について、証拠性に触れない発話ができないのかという点が、記述を行う過程で常に疑問になる。一方、Kalsang et al. (2013:518) には「中立 (neutral)」と呼ぶカテゴリーがあり、本稿の記述における「判断」に対応するように見える。

[8] 「未来」というカテゴリーが Lhagang 方言の体系において必要であるか否かは議論に値する。6.1 節および 7.1 節で記述するように、「非完了」と「推量」のカテゴリーに重複が認められ、「未来」は「意思」と「義務」もまた表し、その形式も動詞連続の一種と分析できる可能性があるためである。詳細は別稿にゆずる。

[9] 動詞語幹の直後につく形態素は、それ自体の声調をもたずに直前の動詞語幹と同一の声調領域を形成するため、接尾辞として機能しているといえる。しかし、否定形や疑問形では、声調をもつ音節が接辞の内部に挿入されるため、必ずしも「接尾辞」となっているとは言えない。

Z 調査票と T 調査票の内容を検討した結果、まず述部の種類を次の６つに分ける。

- 判断動詞
- 存在動詞
- 形容詞述語
- 内的感覚 (endopathic) 動詞
- 制御不可能 (non-controllable) 動詞
- 制御可能 (controllable) 動詞

判断動詞とは、いわゆる繋辞動詞であるが、話者の発話態度によって形態が異なる。存在動詞とは、存在・位置・所有を表す動詞である[10]。形容詞述語には、形態論的に名詞類と動詞類の２種類が認められる。内的感覚動詞とは、体内で感じる状態を表す動詞で、他人による観察が不可能なものである。また、制御可能性が Lhagang 方言の動詞分類に果たす役割についてはなお検討の余地があるが、本稿ではこの分類がなされている T 調査票に従って記述し、結果を提示する[11]。

本稿では、以上に示した６つの述語のカテゴリーそれぞれについて１節を設け、その中で TA の異なりによる下位区分を設けて記述する。また、証拠性はすべての述部形式に対して統一の体系をもつという分析[12]があり、この見方が Lhagang 方言の記述にも大部分は適用可能であること示す[13]。記述に用いる言語資料は、各調査票にある項目（例文）の第２著者による翻訳、および各項目の意図を反映した作例[14]を基本とし、実際の会話からも例をとる。また、長編資料[15]の語りとの相違点について注記する。なお、例の表記には鈴木・四郎翁姆 (2017:23-30) に示した音体系に従った音標文字を用い、音節分かち書きとする。簡便な音体系一覧は付録１を参照。

---

[10] チベット・ビルマ系諸言語における存在表現については黄成龍 (2013) を参照。チベット文化圏東部のチベット系諸言語については、鈴木 (2016), Suzuki (2016) を参照。

[11] 判断動詞と存在動詞を除き、平叙文において証拠性を表す接辞や小辞が現れずに終止する文はまれである。本稿でも TA の関連で言及するが、議論はしない。

[12] Oisel (2017) における証拠性のまとめでは、同一の用語をすべてのタイプの述語に適用している。しかし一方、星・タウワ (2017:147-150) では、Oisel (2017) と異なる体系によるまとめを提示している。

[13] 証拠性の体系がすべての述部のタイプに共通である、ということを出発点にして記述することも考えうる１つのアプローチである。しかしながら、これは Z 調査票や T 調査票の構成とは異なる。また、証拠性の体系がチベット系諸言語において通言語的に共有されうるものであると考えるのは困難である。Gawne & Hill (eds) (2017) 参照。

　したがって、まずは１言語（方言）の証拠性の体系をつかみ、そののち再度このアプローチに戻って述部の分類を考察する、という順序が望ましいと考える。本稿では、この順序で記述を行い、最後に証拠性の体系に与えられる名称について、特別な議論を必要としない部分において、名称変更を行い、それを注記するという方法をとった。

[14] 作例の際には、Oisel (2017) を参照した。

[15] Lhagang 方言の長編資料には、鈴木ほか (2015)、鈴木・四郎翁姆 (2017)、Suzuki & Sonam Wangmo (2017ab) が公開されている。

2　判断動詞

判断動詞の語幹とその主要形態は以下のとおりである[16]。向自己か判断かに基づいて/ˊjiː/または/ˊreʔ/という動詞語幹が選択される[17]。推量、推定の語幹は向自己のものと共通する。

表 1 ：判断動詞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
向自己	ˊjiː	ˊma-jiː	`ʔə-jiː	ˊma-jiː-la
判断	ˊreʔ	ˆma-reʔ	`ʔə-reʔ	ˊma-reʔ-la
推量	ˊjiː-s^{h}a reʔ	ˊjiː-s^{h}a ˆma-reʔ		
	ˊjiː-^{ɦ}dʐɯ reʔ			
推定	ˊjiː-lə reʔ	ˊjiː-lə ˆma-reʔ		

表 1 の「判断」は T 調査票では factual と呼ばれるカテゴリーから得られたデータである。これは、発話そのものが事実かどうかではなく、発話において「事実と認識/判断している」という証拠性の 1 区分に与えられた名称である[18]が、Lhagang 方言においては必ずしもそのような話者の直感が得られない。このため、「判断」という用語を採用する[19]。

向自己の形態は発話者自身に関する事柄を述べるときに現れる (1a)。ただし、向自己の証拠性を明示しない場合、判断の形態も現れうる (1b)。

(1)　a　ˊŋa-ϕ　`ts^{h}õ ^{m}ba-ϕ　ˊjiː
　　1-ABS　商人-ABS　CPV.E
　　私は商人です。
　　b　ˊŋa-ϕ　`ts^{h}õ ^{m}ba-ϕ　ˊreʔ
　　1-ABS　商人-ABS　CPV
　　私は（誰がどう見ても分かるように）商人です。

(2) は判断の形態の現れである。

---

[16] 鈴木・四郎翁姆 (2016) に基づく。加えて、推量および推定の形式を追加した。ほかにも周縁的な形式が存在するが、割愛する。

[17] 語釈について、動詞接辞の形態は分析的に記述するが、その語釈は複合形式とする。明らかに認識を表明する部分が明確に現れる形態には、独立した語釈を与える。詳しくは末尾の付録 2 を参照。

[18] ただし、Oisel (2017:96) は factual を “specific or common fact without indicating the source and the access to information” と定義している。しかし、without 以下の定義は factual という用語からは想定しがたい。

[19] 「判断動詞」における「判断」は、判断動詞のもっとも基本的な用法と理解してよい。言い換えれば、向自己が有標な証拠性である。また、先に触れたように、「無標」という扱いもできる可能性がある。鈴木・四郎翁姆 (2017:51) では non-egophoric（非向自己）という用語を用いた。推量、推測を証拠性ではなく認識の度合い (epistemic) のカテゴリーと考えるならば、Lhagang 方言の判断動詞には証拠性の体系において「感知」のカテゴリーを欠いているため、向自己に対する非向自己というのは妥当性がある。一方で、すべての述部に共通する証拠性のカテゴリーを考えるならば、非向自己というのは成立しがたい。

(2) a ˉtɕʰoʔ-ϕ ˉkʰɑ̃ ᵐba-ϕ ´reʔ
2-ABS カムの人-ABS CPV
あなたはカムの人です。

b ˉkʰo-ϕ ˉkʰɑ̃ ᵐba-ϕ ´reʔ (/ *´jiː)
3-ABS カムの人-ABS CPV
彼はカムの人です。

否定文の場合は (3) のようになる。

(3) a ´ŋa-ϕ `tsʰõ ᵐba-ϕ ´ma-jiː
1-ABS 商人-ABS NEG.CPV.E
私は商人ではありません。

b ˉtɕʰoʔ-ϕ ˉʔa ⁿdo wa-ϕ ˆma-reʔ
2-ABS アムドの人-ABS NEG.CPV
あなたはアムドの人ではありません。

c ˉkʰo-ϕ ˉkʰɑ̃ ᵐba-ϕ ˆma-reʔ
3-ABS カムの人-ABS NEG.CPV
彼はカムの人ではありません。

疑問文では証拠性選択の「予測規則 (anticipation rule)」、すなわち、答えの文に現れうる証拠性の範疇の形態が疑問文において現れる[20]。(4) では、答えが向自己の形態になることを疑問文の段階で予測しているため、発話に向自己の形態が現れている。

(4) ˉtɕʰoʔ-ϕ ˉsʰɯ-ϕ ´jiː
2-ABS 誰-ABS CPV.E
あなたは誰ですか？

向自己以外の証拠性（情報源など）は、接辞の付加によって表す。

(5) a ˉkʰo-ϕ ˉkʰɑ̃ ᵐba-ϕ ´reʔ
3-ABS カムの人-ABS CPV
彼はカムの人です。

b ˉkʰo-ϕ ˉkʰɑ̃ ᵐba-ϕ ˆreʔ-sə reʔ
3-ABS カムの人-ABS CPV-HS
彼はカムの人だということです。

(5b) には伝聞の接辞が現れているが、伝聞を表す形態は豊富にあり、発話のスタイルによっていると考えられる[21]。

推量・推定などの認識の不確実さの度合いを表現する場合、向自己の動詞語幹/´jiː/に接辞を付加して形成する。本稿において、推量とは知覚に基づいて得た情報をもとに推測することを意味し、推定とは知識に基づいて推理することを意味する。

---

[20] Tournadre & LaPolla (2014) 参照。

[21] 形態的には、いずれも語彙的動詞「言う」と関連する。伝聞は情報源を表す証拠性の範疇の 1 つである（Aikhenvald 2015:323）が、これについては稿を改めて議論したい。

(6) a ˥kʰo-ϕ ˩ɦge ɦgɛ-ϕ ˊjiː-ɦdʐɯ reʔ
3-ABS 先生-ABS CPV-EPI
彼はたぶん先生だと思います。

b ˥kʰo-ϕ ˩ɦge ɦgɛ-ϕ ˊjiː-sʰa ˊma-reʔ-pa
3-ABS 先生-ABS CPV-EPI.NEG-INFR
彼はたぶん先生ではないと思います。

(6b) のように、推量の接尾辞に感情を表す小辞/-pa/を付加することで、さらに不確実性を増す表現になる[22]。

/ˊjiː-ɦdʐɯ reʔ/には、/-ɦdʐɯ/に定標識/-tə/がつく形式/ˊjiː-ɦdʐɯ-tə ˊreʔ/があり、確証はないが断定的な発言を形成する (7)[23]。

(7) ˥kʰo-ϕ ˩ɦge ɦgɛ-ϕ ˊjiː-ɦdʐɯ-tə ˊreʔ
3-ABS 先生-ABS CPV-NML-DEF CPV
彼は先生に違いありません。

判断動詞は、通常 TA の標示を行わない。時間の概念は時間名詞や文脈などで表すことになる。なお、物語の語りにおいては、/-kʰeː/という完了/判断（非感知）の接辞がつく（４節以降の記述を参照）が、これは日常会話ではほとんど使われない。語りにおいては、「非感知」を表明することが重要な役割となっているのではないかと考える。

3 存在動詞

Lhagang 方言において、存在動詞は存在・位置・所有を表し、それぞれの意味上の異なりは統語（格標示）の異なりによって表す。存在動詞の語幹とその主要形態は以下のとおりである[24]。

表２：存在動詞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
向自己	ˊjoʔ	ˊmeʔ	`ʔə-joʔ	ˊmeʔ-lə `ʔə-jiː
感知	ˆjiː-tu	ˆmeʔ-tu	`ʔə-jiː-tu	ˊmeʔ-lə `ʔə-jiː
判断	ˆjoʔ-reʔ	ˆjoʔ-lə ˆma-reʔ	ˆjoʔ-lə reʔ	ˊmeʔ-lə `ʔə-reʔ
推量	ˊjoʔ-sʰa reʔ	ˊjoʔ-sʰa ˆma-reʔ		
	ˊjoʔ-ɦdʐɯ reʔ			
推定	ˊjoʔ-lə reʔ	ˊjoʔ-lə ˆma-reʔ		

[22] この/-pa/は動詞接辞の一部ではなく、感情を表現する小辞と理解する。用法は推量のみであるとは言い切れないが、語釈では便宜的に「推量」としておく。

[23] この場合、/-ɦdʐɯ/は名詞化接辞で/-tə/は名詞句を明示する役割を担っていると考え、述部の動詞は判断動詞/ˊreʔ/のみであると分析する。このことは、/ˊreʔ/が独立の声調を担うことからも支持できる。

[24] 鈴木・四郎翁姆 (2016) に基づく。証拠性の名称を他の述語のものと共通になるよう修正を加え、また新たに推量、推測を加えた。

感知の平叙文肯定形には/jiː/という音節が現れるが、これは判断動詞ではなく、/´joʔ/の変異形と考える[25]。なお、会話においては、存在動詞は TA が標示されないが、語りにおいてはアオリストや完了が現れうる。また、推測の接辞は非完了/判断と共通する。

存在動詞は、発話に関する情報へいかにアクセスするかによって形式が異なる。発話内容が知覚し確認した情報で向自己であるものか、単に知覚による情報によるものか、それとも知覚であるかどうかにかかわらず存在表現に対する判断を述べるのかが基本的な差異である。感知は「観察知、新情報」を表し、判断は「定着知、旧情報」を表す[26]。もっとも基本的な証拠性はこれらの意味であり、次いでさまざまな機能、たとえば驚嘆性 (mirativity) などを感知の形式を用いて表すことができる。なお、ここでいう「知覚」は五感のうちのどの感覚であってもよい。

(8) は所有の平叙文の例である。

(8) a ´ŋa-la ´ta jɑ-ϕ ´joʔ
1-DAT お金-ABS EXV.E
私は（今、手に）お金を持っています。

b ¯k^{h}o-la ´ta jɑ-ϕ ˆjiː-tu
3-DAT お金-ABS EXV.SEN
彼は（今、手に）お金を持っています。（見えています）

c ¯k^{h}o-la ´ta jɑ-ϕ ˆjoʔ-reʔ
3-DAT お金-ABS EXV
彼はお金を持っています（金持ちです）。

存在動詞にも向自己の証拠性の形式があるものの、疑問文で「予測規則」が働かず、発話者のそれぞれ異なる意図が反映される。(9) は存在の疑問文の例である。

(9) a ¯ʔa p^{h}a-ϕ ˆnɔ̃-la `ʔə-joʔ
父-ABS 家-LOC EXV.E.Q
お父さんは家にいますか？（あなたは今いっしょにいますか）

b ¯ʔa p^{h}a-ϕ ˆnɔ̃-la `ʔə-jiː-tu
父-ABS 家-LOC EXV.SEN.Q
お父さんは家にいますか？（あなたはいるところを見ましたか）

c ¯ʔa p^{h}a-ϕ ˆnɔ̃-la ˆjoʔ-lə reʔ / ´joʔ-lə `ʔə-reʔ
父-ABS 家-LOC EXV.Q
お父さんは家にいますか？（家にいるような習慣の人ですか）

推量・推定などの認識の不確実さの度合いを表現する場合、(10) に掲げるように、向自己の動詞語幹/´joʔ/に接辞を付加して形成する。

---

[25] 感知の否定形を見れば、それが存在動詞の語形であるということが分かる。このため、体系上/-tu/の前には存在動詞がくると考えて問題ないといえる。また、判断動詞には感知の語形が存在しない。このため、２種の動詞において形式が衝突することはない。

[26] 「観察知」、「定着知」という用語は星 (2003) がラサ方言の記述に用いている。また、星 (2016:97) によると、この用語は 14 世紀のチベット文語にもあてはまる。

(10) a ˥kʰo-la ´ta jɑ ´mɑ̃ bo-ϕ ´joʔ-sʰa reʔ
3-DAT お金 多い-ABS EXV-EPI
たぶん彼はたくさんのお金をもっていると思います。

b ´ta ʰta ´ɳɑː ɳõ-ϕ ´joʔ-sʰa ˆma-reʔ
今 子供-ABS EXV-EPI.NEG
たぶん今子供はいないと思います。

疑念の強いことを表す場合、疑問文の形態で否定の意味を表現する (11)。

(11) ´ta ri ˥kʰa ʰtsɔ ˥kʰo-ϕ ˆnɔ̃-la `ʔə-joʔ-na
最近 3-ABS 家-LOC Q-EXV-PART
最近彼は家にいないと思います。

4 形容詞述語

形容詞述語は２種類のタイプがある。１つは名詞的なもの、もう１つは状態動詞的なものである。それぞれ次のような例がある。

- 名詞的：˥ʰkaː ʱbo「白い」、´ʱdʑɑʔ pa「太った」
- 状態動詞的：`ⁿ̥tɕʰɑʔ「冷たい/寒い[27]」、´ʑiː「おいしい」

形容詞の中には、全く同じ意味を表し派生関係にある２つの形式が、名詞的形容詞・状態動詞的形容詞のペアをなす場合がある。たとえば、/´ʱdʑɑʔ pa/ - /´ʱdʑɑʔ/「太った」、/´ʑiː po/ - /´ʑiː/「おいしい」のようである。

両者は述部を形成するときに異なる構造をとる。例を見る限り、証拠性のカテゴリーによって相補分布しているといえる。形容詞述語の基本構造と接辞の組み合わせは次のようである。A=状態動詞的形容詞、An=名詞的形容詞とする。

表３：形容詞述語とそれにつく接辞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
向自己	An ´jiː-lə reʔ	An ´jiː-lə ´ma-reʔ	An ´jiː-lə `ʔə-reʔ	
判断	An ´reʔ	An ˆma-reʔ	An `ʔə-reʔ	
感知	A-tu	´mə-A-tu	`ʔə-A-tu	
非完了	A-lə reʔ	A-lə ˆma-reʔ	A-lə `ʔə-reʔ	
完了/判断	A-kʰeː	´ma-A-kʰeː	`ʔə-A-kʰeː	
推量	An ´jiː-sʰa reʔ	An ´jiː-sʰa ˆma-reʔ		
	A-sʰa reʔ	A-sʰa ˆma-reʔ		

名詞的形容詞は、現状を事実と判断する述部を形成する際に現れ、形容詞のあとに判断動詞

[27] Lhagang 方言では「（外気が）冷たい」と「寒さを覚える」は同形である。後者は形容詞ではなく、内的感覚動詞（５節）に分類される。

が用いられる (12)。向自己の場合、さらに非完了の接辞/-lə reʔ/を伴う[28] (12a)。

(12) a ´ŋa-ϕ ¯ɕʰa ´ʱdʑɑʔ pa-tɕiʔ ´jiː-lə reʔ
1-ABS 太った-NDEF CPV.E-NPFT
私は太っています。

b ¯kʰo-gə ´ko zɛ-ϕ ¯tʰɑ̃ tɕeʔ ¯ʰkaː ʱbo ´reʔ
3-GEN 服-ABS ほとんど 白い CPV
彼の服はほとんどが白いです。

非向自己の発話の場合、疑問文は判断の形態に加えて向自己の形態も用いられることがある (13)。ただし両者の意味上の差異は明らかではない。

(13) ¯kʰo-ϕ ´ʱdʑɑʔ pa-tɕiʔ `ʔə-reʔ / ´jiː-lə `ʔə-reʔ
3-ABS 太った-NDEF Q-CPV / CPV.E-NPFT.Q
彼は太っていますか？

状態動詞的形容詞は、現状（事実）認定以外の何らかの証拠性を表現する述部を形成する際に用いられ、多くの場合、感知を表す接辞を伴う (14, 15)。

(14) a ¯ɕʰə la ¯ʰʈɑː mo `ˀ̊tɕʰɑʔ-tu
外 とても 寒い-SEN
外はとても寒いです。

b ¯kʰo tsʰo-gə ¯tsʰɛː-ϕ ¯tʰɑ̃ tɕeʔ ˆʑiː-tu
3.PL-GEN 料理-ABS ほとんど おいしい-SEN
彼らの料理はほとんどがおいしいです。

状態動詞的形容詞は、動詞語幹と同様に、接頭辞も付加できる (15)。

(15) ¯ɕʰə la `ʔə-ˀ̊tɕʰɑʔ-tu
外 Q-寒い-SEN
外は寒いですか？

推量の形式は、名詞的形容詞の場合/An ´jiː-sʰa reʔ/の形をとり (16)[29]、状態動詞的形容詞の場合/A-sʰa reʔ/の形をとる (17)。前者の場合、不定標識/-tɕiʔ/が挿入されうる (16a)。

(16) a ¯kʰo-ϕ ´ʱdʑɑʔ pa-tɕiʔ ´jiː-sʰa reʔ
3-ABS 太った-NDEF CPV-EPI
彼はたぶん太っていると思います。

b ¯kʰo-ϕ ´ʱdʑɑʔ pa ´reʔ-joʔ-sʰa reʔ
3-ABS 太った なる-CONT.EPI
彼はおそらく太ってしまったと思います。

---

[28] この形式は、判断動詞の「推定」のものと形態上は同一になるが、名詞的形容詞に後続する場合、推定の意味ととらえることは難しい。(12a) について考えると、発話者が「自分が太っている」と言及するのは主観であって、推理によるものと考えるのは母語話者の直感にそぐわないためである。しかし、太っているかどうかを判断するために他人と比較し、それに基づいて思考した結果、自身が太っていると考える、という思考過程を経ているならば、推理していると言えなくもない。

[29] ただし、(16b) に示すように、変化を表す場合は動詞/´reʔ/が用いられる。

(17) a ¯ɕʰə la-tə ¬ⁿ̥tɕʰɑʔ-sʰa reʔ
外-TOP 寒い-EPI
外はたぶん寒いと思います。

b ¯ɕʰə la-tə ¬ⁿ̥tɕʰɑʔ-sʰa ˆma-reʔ
外-TOP 寒い-NEG.EPI
外はたぶん寒くないと思います。

状態動詞的形容詞述語には、変化を伴う（たとえば「太い」＞「太る」）意味を、完了とアオリストについて接辞で表すことができる。その接辞は完了/判断（直接非確認・非感知）の接辞/-kʰeː/ である[30]。通常の発話では、形容詞の表す状態変化の一部始終を感知することはできないためであると考えられる。(18, 19) がその例である。

(18) ¯kʰo-ϕ ˋʱgeː-kʰeː
3-ABS 老いた-PFT.NSEN
彼は年を取りました。

(19) ´na nĩ lo ´ʱgũ kʰa-ϕ ¬ʰʈɑʔ mo tɕiʔ ˋⁿ̥tɕʰɑʔ-zə ˆjiː-kʰeː
去年 冬-ABS とても 寒い-AOR-PFT.NSEN
去年の冬はとても寒かったのです。

名詞的形容詞述語で、変化を表す場合には、主動詞として/´reʔ/「なる[31]」を付加する (20)。

(20) a ¯kʰo-ϕ ´ʱdʑɑʔ pa-tɕiʔ ˆreʔ-reʔ
3-ABS 太った なる-STA
彼は太るでしょう。

b ¯kʰo-ϕ ´ʱdʑɑʔ pa-tɕiʔ ˆreʔ-kʰeː
3-ABS 太った なる-PFT.NSEN
彼は太りました。

(20a) において、「これから太る」という意味で判断の接辞がつくのは、「なる」という動詞自体のアスペクトが終結性をもつからで、「なっている」という意味をもたないからであると考える。

完了の推定は/-tu-pa/の形をとる (21)。/-pa/は動詞の接辞ではなく、述部全体にとっての接辞と考える[32]ため、表３には含めていない。

(21) ¯ɕʰə la ˋⁿ̥tɕʰɑʔ-tu-pa
外 寒い-SEN-INFR
外は寒くなったでしょう。

---

[30] 完了は感知・非感知が対立をなすカテゴリーである。しかしながら、証拠性の体系を見ると、「感知」のカテゴリーを有標と考えることができる。そうすると、無標のものを「判断」のカテゴリーに入れてもよい。少なくとも、判断動詞（２節）については、非向自己の形態を「判断」としている。

[31] この形態は判断動詞/´reʔ/と同じであるが、機能も接辞のつき方も異なるため、共時的には同音異義語と考える。文語の場合、《藏漢大辭典》(1985:2720) によれば、判断動詞と語彙的動詞「なる、完成する」は別項目となっている。

[32] ２節の (6b) を参照。

5　内的感覚動詞

内的感覚動詞とは/ˉ^{h}toʔ/「空腹である」、/ˊna/「病気である」、/ˋ^{h}ʈɑʔ/「怖がる」など、通常は他者が確認できないような感覚、感情を表す語をさす[33]。単項動詞と多項動詞があり、後者は感覚を覚える対象を与格で表す。ただし、この種の動詞はさらに分類できる可能性がある。内的感覚動詞と共起する基本的な接辞には、以下のようなものがある。大きく非完了類と完了類に分かれる。

表４：内的感覚動詞につく接辞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
判断	V-reʔ	V ˆma-reʔ	V-lə ˋʔə-reʔ	V ˊma-reʔ-la
感知	V-tu	ˊmə-V-tu	ˋʔə-V-tu	
推量	V-ɕə ˆjiː-tu-pa	V-ɕə ˆmeʔ-tu-pa		
推定	V-s^{h}a reʔ(-pa)	V-s^{h}a ˆma-reʔ(-pa)		
アオリスト	V-zə reʔ			
完了/感知	V-t^{h}eː	ˊma-V-t^{h}eː	ˋʔə-V-t^{h}eː	
完了/判断	V-k^{h}eː	ˊma-V-k^{h}eː	ˋʔə-V-k^{h}eː	

判断の接辞は発話者自身に関すること以外（すなわち他者）で、その内的感覚が習慣的なものとして発話者が認識している場合、また疑問文の場合は習慣的と認識していることを前提とする場合に用いられる (22a)。判断の疑問形式は形態上非完了[34]と同形になる (22b)。

(22)　a　ˉk^{h}o-ϕ　ˊn̥iː ts^{h}e ts^{h}e　ˊ^{ɦ}gõ mo-la　ˋ$^{n̥}$tɕ^{h}ɑʔ-reʔ
　　3-ABS　いつも　夜-LOC　寒い-STA
　　彼はいつも夜寒がっています。
　b　ˉtɕ^{h}oʔ-ϕ　ˊtɕ^{h}ə ^{ɦ}gɛ-la　ˋ^{h}ʈɑʔ-lə ˋʔə-reʔ
　　2-ABS　犬-DAT　怖い-NPFT.Q
　　あなたは犬が怖いですか？

発話者自身が感覚を覚える主体である場合には、感知の接辞を用いる (23a)。発話者（疑問文の場合は聞き手：予測規則）が感覚を覚える主体でない場合、伝聞の接辞がつく (23b)。

[33] しかしながら、他者が「空腹である」ことを腹から発する音で知覚したり、外見から「病気である」ことや「怖がる」ことを察することは可能である。しかし、以下に記述するように、用いられる動詞接辞が限定的になることから、動詞語幹自体が他の語彙的動詞と異なるカテゴリーに属すると考えることができる。

[34] ６節の表５を参照。

(23) a ˊŋa-ϕ ¬ŋgo-ϕ ˆna-tu
1-ABS 頭-ABS 痛い-SEN
私は頭が痛いです。
b ¬k^{h}o-ϕ ¬ŋgo-ϕ ˆna-tu-ze
3-ABS 頭-ABS 痛い-SEN-HS
彼は頭が痛いそうです。

習慣的な描写であっても、発話者が「感知」の意図すなわち知覚を通して得た情報であることを述べたい場合には、感知の接辞を用いることができる (24)。

(24) ¬k^{h}o-ϕ ˊn̥iː ts^{h}e ts^{h}e ˊ^{ñ}gõ mo-la ˋ$^{n̥}$tɕ^{h}ɑʔ-tu-ze
3-ABS いつも 夜-LOC 寒い-SEN-HS
彼はいつも夜寒いそうです。

推量の形式は６、７節で記述する「進行」の接辞と共通するが、常に/-pa/を伴う点に注意が必要である[35]。他者の感覚を描写するときにのみ用いられる (25)。

(25) ¬k^{h}o-ϕ ˋ$^{n̥}$tɕ^{h}ɑʔ-ɕə ˆjiː-tu-pa
3-ABS 寒い-PROG-INFR
彼はたぶん寒がっているでしょう。

(26a) は「彼」の様子を見たり、腹が音を立てるのを聞いたりした場合の発話で、(26b) は「彼」の様子を直接確かめることなく、常識などから推測して述べた場合の発話である。

(26) a ¬k^{h}o-ϕ ¬^{h}toʔ-ɕə ˆjiː-tu-pa
3-ABS 空腹だ-PROG-INFR
彼はたぶん空腹でしょう。
b ¬k^{h}o-ϕ ˋ^{h}toʔ-s^{h}a ˆreʔ-pa
3-ABS 空腹だ-EPI-INFR
彼は空腹に違いありません。

感知には非完了（表４では単に「感知」と記述）と完了の異なりがある。この違いは、当該の感覚を覚えた時点に現在が含まれているかどうかになる (27)。

(27) a ˋʔə-$^{n̥}$tɕ^{h}ɑʔ-tu
Q-寒い-SEN
（今）寒いですか？（寒いと感じますか）
b ˋʔə-$^{n̥}$tɕ^{h}ɑʔ-t^{h}eː
Q-寒い-PFT.SEN
（少し前）寒かったですか？（寒いと感じましたか）

完了したことについての推量は、完了/判断の接辞そのままで表すことができるほか、不確実であることを表現するために/-pa/を付加することができる。これは、完了/判断の接辞それ自体が発話者が確認していないことに基づく情報によるため、すでに推量の範囲を多少なりとも含

[35] ただし語釈では/-pa/に対して個別の分析を施す。

んでいるからであると判断できる (28)。

(28) ˊtɯ tsʰeʔ kʰa ˥kʰo-ϕ ˋʰtoʔ-kʰeː-pa
あのとき 3-ABS 空腹だ-PFT.NSEN-INFR
あのとき彼はたぶん空腹だったでしょう。

6 制御不可能動詞

制御不可能動詞とは次のような語をさす。/ˊᵐbɑʔ/「降る」、/˥loː/「転倒する」、/˥kʰeʔ/「勝つ」、/˥tɕʰɑʔ/「壊れる」など。

以下、TA によって次の３つのカテゴリーに分けて述べる：非完了類（非完了、意思未来）、継続類（習慣、状態、進行）、完了類（アオリスト、完了）[36]。それぞれの記述に先立って、接辞の基本形態をまとめる。これは制御不可能動詞と制御可能動詞に共通する。ただし、それぞれの動詞のカテゴリーによって組み合わせの認められない接辞がある[37]。

6.1 非完了類

表５：非完了類を表す接辞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
非完了/向自己	V-lə jiː	V-lə ˊma-jiː	V-lə ˋʔə-jiː	V ˊma-reʔ-la
非完了/意思	V-liː			
非完了/判断	V-lə reʔ	V-lə ˆma-reʔ	V-lə ˋʔə-reʔ	
非完了/推量	V-sʰa reʔ	V-sʰa ˆma-reʔ	V-sʰa ˋʔə-reʔ	
未来/向自己	V-ᶠgo	V ˊmə-ᶠgo	V ˋʔə-ᶠgo	
未来/判断	V-ᶠgo reʔ	V-ᶠgo ˆma-reʔ		
未来/感知	V-ᶠgo ˆʰsɑ̃-ɕə ˊjiː-tu			
未来/推量	V-ᶠgo-sʰa reʔ	V-ᶠgo-sʰa ˆma-reʔ		

制御不可能動詞には、意思形および未来形が現れない。非完了/意思形は非完了/向自己形の一種の変形であると考えられる。非完了形のうち、行為の実現が不明確な場合、推量の接辞を用いる (29, 30)。

(29) ˊsʰõ ɲĩ ˥kʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-sʰa reʔ
明日 雪-ABS 降る-EPI
明日は雪が降りそうです。

[36] これは便宜的なものである。２項対立でカテゴリー化する場合、非完了類（継続含む）と完了類に分けられる。実際、非完了と継続で重なる部分がある。

[37] これは Lhagang 方言の動作動詞が制御可能性とは異なる性質で分類、記述する必要があることを示唆する。ただし、本稿ではこれについて議論をせず、T 調査票の分類に従って提示する。

(30)　ˊsʰõ ɲĩ　˩kʰɑː-ϕ　ˆᵐbɑʔ-sʰa ˆma-reʔ
明日　雪-ABS　降る-EPI.NEG
明日は雪が降らないでしょう。

未来形は確定的な動作・行為を表すとともに、義務 (deontic) を表す場合もある。/-ᶠᶦgo/という形態素は「必要とする」という語彙的動詞としても用いられ、場合によっては動詞連続として分析することも可能である[38]。

また、今にも行為が実現しそうなことを「感知」して発話する場合、/V-ᶠᶦgo ˆʰsã-ɕə ˊjiː-tu/「～しようとしている」という形態が現れる (31)。この否定形は認められない。

(31)　˩kʰɑː-ϕ　ˆᵐbɑʔ-ᶠᶦgo ˆʰsã-ɕə ˊjiː-tu
雪-ABS　降る-FUT-PROG.SEN
雪が（もうすぐ）降りそうです。

(32) は、発話者が状況を見て「行かざるを得ない」と考えている状況での発話である。

(32)　ˊŋa-ϕ　˩tsʰoʔ sʰa　ˊᶯɖo-ᶠᶦgo-sʰa reʔ
1-ABS　集会所　行く-FUT.EPI
私が集会所に行かないといけないようです。

疑問文の場合も推量の形式が用いられる (33)[39]。

(33)　ˊsʰõ ɲĩ　˩kʰɑː-ϕ　ˆᵐbɑʔ-sʰa ˋʔə-reʔ
明日　雪-ABS　降る-EPI.Q
明日は雪が降りますか？

6.2　継続類

表６：継続類を表す接辞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
継続/向自己	V-joʔ	V-meʔ	V-joʔ-lə ˋʔə-jiː	V-meʔ liː
継続/判断	V-joʔ reʔ	V-joʔ ˆma-reʔ	V-joʔ-lə ˋʔə-reʔ	
継続/感知	V-jiː-tu			
継続/推量	V-joʔ-sʰa reʔ	V-joʔ-sʰa ˆma-reʔ		
習慣/判断	V-reʔ	V-lə ˆma-reʔ	V-lə ˋʔə-reʔ	
進行/向自己	V-ɕə joʔ (-ɕɔː)	V-ɕə meʔ	V-ɕə joʔ-lə ˋʔə-jiː	
進行/判断	V-ɕə joʔ reʔ (-ɕɔː reʔ)		V-ɕə joʔ-lə ˋʔə-reʔ	
進行/感知	V-ɕə jiː-tu (-ɕiː-tu)	V-ɕə meʔ-tu	V-ɕə ˋʔə-jiː	
進行/推量	V-ɕə joʔ-sʰa reʔ	V-ɕə joʔ-sʰa ˆma-reʔ		

[38] 「語幹＋接辞」か「動詞連続」かを判別する、形態音韻論的根拠は明確ではない。接辞の/-ᶠᶦgo/には前気音を伴わない [-go] が認められる程度である。

[39] 推量、推定の疑問形は容認されないことが多い。しかし、文字通り「推量」の意味で用いられない場合は、(30) のように、相手の返答を予測して（予測規則）、形態上推量の形式の疑問文を形成することができる。

継続は、ある状態が続いていることを示す。向自己と判断の現れは (34) のようである。

(34) a ˊŋa-ϕ ˋʔa na ˆⁿduʔ-joʔ
1-ABS ここで 滞在する-CONT
私はここに滞在しています。

b ˉkʰo-ϕ ˋʔa na ˆⁿduʔ-joʔ reʔ
3-ABS ここで 滞在する-CONT
彼はここに滞在しています。

継続/感知は、意味上は伝聞とも分析できるが、知覚によって情報を得たという含意がある (35)。

(35) ˉkʰo-ϕ ˊte rĩ ˉm̥ɛ̃ kʰõ-nə ˆⁿduʔ-jiː-tu
3-ABS 今日 病院-INE 滞在する-STA.SEN
彼は今日（も）病院に（入院して）いるそうです。

継続/判断の疑問形が疑問を表さず、感知によって今知ったことを述べる際に用いられることがある (36)。一種の驚嘆の表現であるともいえる（３節参照）。

(36) ˉʔo ˉʱlo ʱzõ-ϕ ˆⁿduʔ-joʔ-lə ˋʔə-reʔ
INTJ PSN-ABS 座る-CONT.Q
あ、ロゾンは（ここに）いたのですのか。

習慣/判断は事実であると認識している、という含意がある。「習慣」というカテゴリーは周縁的なものであり、独立した形態としては判断の証拠性をもつ平叙文肯定形のみが認められる (37)[40]。

(37) ˊʱdʑɯ ⁿde ˉkʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-reʔ
一般に 雪-ABS 降る-STA
一般に、（ここでは）雪が降ります。（このことを習慣的だと認識しています）

動詞語幹に直接/-pa/をつけると、不確かな記憶に基づく発話になる (38)。形態上、習慣/判断の判断を表す部分が小辞に置き換わっていると理解できる[41]。

(38) ˉpʰaː ʰtɕɛʔ ˊŋa-ϕ ˉl̥a sʰa-la ˊn̩i ma ˉʰsũ ˆⁿduʔ-pa
たぶん 1-ABS PLN-LOC 日 3 滞在する-INFR
たぶん私はラサに３日間滞在するはずです。

進行は、ある動作/行為が継続中であることを示す (39)。

(39) ˉkʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-ɕə jiː-tu
雪-ABS 降る-PROG.SEN
雪が降っています。

---

[40] 接辞は形態論的に判断の証拠性をもつ判断動詞と同じである。ただし、直接動詞語幹につき、声調領域も動詞語幹と一体化する。習慣/判断の形態は、内的感覚動詞（５節）につく判断の証拠性の形態とも共通する。

[41] 以下の例文は Oisel (2017:98) による。Oisel (2017:98) はこの用法を ‘mnemic’ と呼んで証拠性の１つの機能と考えている。Lhagang 方言では、小辞を用いる点で、動詞形態論の中で体系をなしているようには見えない。

不確実さは向自己の接辞に/-sʰa reʔ/を付加して表す (40, 41, 42)。推量と推定に明確な差異は現れない。

(40) ˊrə ⁱgɔ̃-la-tə ¯kʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-joʔ-sʰa reʔ
山の上-LOC-TOP 雪-ABS 降る-CONT.EPI
山の上では雪が降るでしょう。

(41) ˊŋa-ϕ ¯tɕʰɑ̃ sʰa ˊna-joʔ-sʰa ˆma-reʔ
1-ABS 風邪をひく-CONT.EPI.NEG
私は風邪をひいてはいないと思います。

(42) ˊrə ⁱgɔ̃-la-tə ¯kʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-ɕə joʔ-sʰa reʔ
山の上-LOC-TOP 雪-ABS 降る-PROG.EPI
山の上では雪が降っているでしょう。

/-tu/が動詞語幹に直接つく事例が認められるが、この接辞は単なる感知を表すのではなく、動詞の表す動作が発話者に不快な感情を引き起こしていることを表し、被害感情を含むものとなる (43)[42]。

(43) ˋkʰɑː-tɕiʔ-ϕ ˆᵐbɑʔ-tu
雪-NDEF-ABS 降る-CIS
雪に（ずっと）降られています。

6.3 完了類

表７：完了類を表す接辞の基本形態

	平叙		疑問	
	肯定	否定	肯定	否定
アオリスト	V-zə	ˊma-V-zə	ˋʔə-V-zə	
アオリスト/向自己	V-zə jiː	V-zə ˊma-jiː ˊma-V-zə-jiː	V-zə ˋʔə-jiː	ˊma-V-zə ˋʔə-reʔ
アオリスト/判断	V-zə reʔ	V-zə ˆma-reʔ	V-zə ˋʔə-reʔ	ˊma-V-zə ˋʔə-reʔ
アオリスト/推量	V-zə ˊjiː-sʰa reʔ	V-zə ˊjiː-sʰa ˆma-reʔ		
完了/感知	V-tʰeː	ˊma-V-tʰeː ˊma-V-tʰeː-jiː	ˋʔə-V-tʰeː	
完了/判断	V-kʰeː	ˊma-V-kʰeː ˊma-V-kʰeː-la	ˋʔə-V-kʰeː	

アオリストには、動詞接辞の体系の中で、例外的に証拠性を明示しない形態/-zə/が認められる。本稿においては、この形態を表７に含めず、存在することを報告するにとどめる[43]。

[42] 語釈は暫定的に cislocative（向発話者）を与えているが、詳細な検討が必要である。(43) の事例では、単に動作が発話者に向かってくるという意味ではない、ということに注意が必要である。

[43] 具体例については、**7.3** の例文 (73) を参照。

アオリストと完了の間に認められる意味的な異なりは、たとえば (44) のように区別される。

(44) a ˥kʰo-ϕ ˊʱʑiʔ ʱdɑʔ ˆʱdʑɑʔ-zə reʔ
3-ABS 滑って転ぶ-AOR
彼は滑って転びました。

b ˥kʰo-ϕ ˊʱʑiʔ ʱdɑʔ ˆʱdʑɑʔ-tʰeː
3-ABS 滑って転ぶ-PFT.SEN
彼は滑って転びました。（それを私は目撃しました）

c ˥kʰo-ϕ ˊʱʑiʔ ʱdɑʔ ˆʱdʑɑʔ-kʰeː
3-ABS 転ぶ-PFT.NSEN
彼は滑って転びました。（それを私は目撃していませんが、知っています）

アオリストは、発話の焦点が動作そのものに向いている (44a)。また、向自己か判断かを選択できる。

完了は感知 (44b) か非感知 (44c) かで区別される。しかしながら、接辞の証拠性の分類においては、非感知を判断のカテゴリーと考えた。これは存在動詞（３節）における「定着知、旧情報」に関連するところがあると考えられ、かつ存在動詞についてはこのカテゴリーの証拠性を判断としたためである[44]。発話者自身に関する動作の描写には、特定の状況でのみ用いられる。たとえば、(45) では発話者自身がテレビに映っていた自身について述べている。

(45) a ˊⁿdɔː sʰɔ ˊʱgõ mo ˊŋa-ϕ ˊtjɛ̃ sə-nə ˆpiː-tʰeː
昨日の夜 1-ABS テレビ-INE 現れる-PFT.SEN
昨日の夜私はテレビに出ていました。（私は目撃しました）

b ˊⁿdɔː sʰɔ ˊʱgõ mo ˊŋa-ϕ ˊtjɛ̃ sə-nə ˆpiː-kʰeː
昨日の夜 1-ABS テレビ-INE 現れる-PFT.NSEN
昨日の夜私はテレビに出ていました。（私は見ていませんが、知っています）

疑問文のときには、それぞれ異なるニュアンスをもつ。たとえば、(46a) の完了/感知の形態は、発話者と聞き手が同一の空間にいない場合（たとえば電話）に用いられ、(46b) の完了/判断の形態は、発話者と聞き手が同一の空間にいる場合に用いられる。一方で (46c) のアオリストの場合には、動作が現在とは切り離されて理解される。これは疑問文の「予測規則」の観点から説明できる。発話者と聞き手が同一の空間にいない場合、発話者は聞き手に自身が感知して得た情報に基づいた返答を期待し、一方発話者と聞き手が同一の空間にいる場合は、知覚の条件が両者で同じであることから、非感知による情報に基づく返答を求めているものといえる。

[44] 一方で、完了/非感知は推量による発話にも現れる場合がある。この点で、完了の接辞の分類は、他の TA に関する証拠性と異なる分類が必要になる可能性がある。語釈では、Suzuki & Sonam Wangmo (2017bc) で用いている「非感知」を引き続き用いた。

(46) a ˊⁿdɔː sʰɔ ˉkʰɑː-ϕ ˋʔə-ᵐbɑʔ-tʰeː
昨日 雪-ABS Q-降る-PFT.SEN
昨日雪が降りましたか？
b ˊⁿdɔː sʰɔ ˉkʰɑː-ϕ ˋʔə-ᵐbɑʔ-kʰeː
昨日 雪-ABS Q-降る-PFT.NSEN
昨日雪が降りましたか？
c ˊⁿdɔː sʰɔ ˉkʰɑː-ϕ ˆᵐbɑʔ-zə ˋʔə-reʔ
昨日 雪-ABS 降る-AOR.Q
昨日雪が降りましたか？（今は降っていないし降った痕跡もないけれども）

制御不可能動詞の中で、アオリストの接辞を用いると「わざとする」の意味が現れるものがある (47)。

(47) a ˊŋa-ϕ ˉzeː-noː-kʰeː
1-ABS 言う-間違う-PFT.NSEN
私は（たまたま）言い間違えてしまいました。
b ˊŋa-ϕ ˉzeː-noː-zə
1-ABS 言う-間違う-AOR
私は（意図して）言い間違えました。

疑問文の場合、アオリストと完了の違いは、今分かったか前から分かっていたのかという点に現れ、次のように異なるニュアンスをもつ (48)。

(48) a ˉtɕʰoʔ-ϕ ˋʔə-ko-tʰeː
2-ABS Q-理解する-PFT
分かりましたか？（すでに分かっているのかどうか知りたいのです）
b ˉtɕʰoʔ-ϕ ˋʔə-ko-zə
2-ABS Q-理解する-AOR
分かりましたか？（今言ったことを理解したかどうかを確認したいのです）

不確実さは、継続類と同じく/V-joʔ-sʰa reʔ/で表す。例は省略する。

7 制御可能動詞

制御可能動詞とは次のような語をさす。/ˊⁿɖo/「行く」、/ˊlɛː/「作る」、/ˊza/「食べる」など。制御可能動詞にも制御不可能動詞と同様の TA の体系が適用され、先の表５、６、７にある接辞が付加される。以下の記述は６節と同様に、非完了類、継続類、完了類に分けて行う。

7.1 非完了類

話者自身の動作についての発話では、３つの接辞が選択可能である。このうち、「未来」の形式は一般動詞/ˊᶠgo/「必要である」と共通し、動詞連続の第２要素として機能していると分析で

きる可能性もある[45]。(49) は非完了/向自己、非完了/意思、未来/向自己の形式の対照である。

(49) a ˊŋa-ϕ ˊⁿɖo-lə jiː
1-ABS 行く-NPFT.E
私は（これから）行きます。

b ˊŋa-ϕ ˆⁿɖo-liː
1-ABS 行く-NPFT.E
私は（これから）行こうとしています。

c ˊŋa-ϕ ˆⁿɖo-ᶠᶦgo
1-ABS 行く-FUT.E
私は（もう）行きます（よ）/行かないといけません。

未来/判断の形式は、発話の状況によって「義務」の含意がある (50)。

(50) ¯sʰɔː n̩ĩ ˊŋa-ϕ ˊlɛ ʰka-ⁿdə ˊlɛː-ᶠᶦgo reʔ
明日 1-ABS 仕事-これ する-FUT
明日私はこの仕事をしないといけないのです。

否定文と疑問文（「予測規則」）については、２つの接辞が選択可能である (51)。

(51) a ¯tɕʰoʔ-ϕ ¯za ma-ϕ ˊlɛː-lə ˋʔə-jiː
1-ABS ごはん-ABS 作る-NPFT.E.Q
あなたはごはんを作りますか？

b ¯tɕʰoʔ-ϕ ¯za ma-ϕ ˊza-lə ˋʔə-ᶠᶦgo
1-ABS ごはん-ABS 食べる-FUT.E.Q
あなたはごはんを食べたいですか？

話者以外の動作についての発話では、習慣/判断か非完了/判断の２つの接辞が選択可能である。(52a) は動作の実現が決定的であるが未だ開始されていないことを意味し、(52b) は話者による推測[46]を含意する。

(52) a ¯kʰo-ϕ ¯ʰʈe me tɕiʔ ˆᶠᶦgoʔ nə ¯za ma-ϕ ˆlɛː-reʔ
3-ABS 少ししてから ごはん-ABS 作る-STA
彼は少ししてからごはんを作ります。

b ¯kʰo-ϕ ¯za ma-ϕ ˆlɛː-lə reʔ
3-ABS ごはん-ABS 作る-NPFT
彼はごはんを作るでしょう。

否定文および疑問文では非完了/判断の接辞のみが用いられる (53)。

[45] **6.1** 参照。

[46] 非完了/判断はこれから起こることについての言明が含まれ、それはある程度の推量や推定が含まれる。表５で示したように、不確実性の表現には非完了/推量のカテゴリーに属する形式があり、非完了/判断の表す推測とは異なる。

(53) a ˥kʰo-ϕ ˥za ma-ϕ ˊza-lə ˆma-reʔ
3-ABS ごはん-ABS 食べる-NPFT.NEG
彼はごはんを食べません。
b ˥kʰo-ϕ ˥za ma-ϕ ˊza-lə ˋʔə-reʔ
3-ABS ごはん-ABS 食べる-NPFT.Q
彼はごはんを食べますか？

不確実さを表すには/V-sʰa reʔ/となる。/V-ᶠʰdʑɯ reʔ/も認められる (54)[47]。推量と推定に明確な差異は現れない。

(54) a ˊkʰo-gə ˥kõ ⁿdʑa-ϕ ˊtɕa -sʰa reʔ
3-ERG モモ-ABS 作る-EPI
彼は（たぶん）モモ（肉まん）を作るでしょう。
b ˥kʰo-ϕ ˊⁿɖo-ᶠʰdʑɯ reʔ
3-ABS 行く-EPI
彼は（たぶん）行くでしょう。

不確実さは以上に示した以外にも、副詞（句）や動詞連続を用いて表すことができるが、ここでは省略する。

7.2 継続類

一般的動作や習慣的動作の表現には、判断の接辞が用いられる (55)。

(55) ˥kʰo tsʰo-ϕ ˋtʰã ʰtɕeʔ ˊⁿdzo mo-ϕ ˋʰso-reʔ
3.PL-ABS ほぼ ゾモ-ABS 飼う-STA
a 彼らはみなゾモ（ヤクとめす牛の雑種）を飼っています。
b 彼らはみなゾモを飼っていたものです。
c 彼らはみなゾモを飼おうとしています。

発話者自身に関することであっても、習慣や確定的・確信的な動作・行為を表す場合、向自己の形態は認められない (56, 57)。

(56) ˊŋa-ϕ ˥tɕʰɔ̃-ϕ ˋ̥ⁿtʰõ-reʔ
1-ABS 酒-ABS 飲む-STA
私はお酒を飲みます。

(57) ˊŋa-ϕ ˥ᶠge ᶠgɛ-ϕ ˆreʔ-reʔ
1-ABS 先生-ABS なる-STA
私は絶対に先生になります。

習慣や状態を描写するときに、証拠性の接辞を用いず、文末小辞を用いる例があるが、慣用

[47] Lhagang 方言において/ˊŋa ˊⁿɖo-ᶠʰdʑɯ jiː/「私は行くつもりです」という発話も見受けられる。しかしながら、これはアムドチベット語の影響を受けた表現であると考えられ、Suzuki & Sonam Wangmo (2015, 2017a) のいう Lhagang-A（アムドチベット語を取り込んだ社会言語学的変種）の形態である。通常は/V-sʰa reʔ/を用いる。

表現として理解するほうがよい可能性がある (58[48])。

(58) ˉtɕʰoʔ-ϕ ˉpʰɑʔ ʱgɛ ˊᶯɖa-ʰtɕiʔ-ϕ ⁻ʱzu-ne
2-ABS ぶた 似た-NDEF-ABS する-PART
あなたはぶたみたいな（ことをする）人ですね。

習慣の否定文や習慣を尋ねる疑問文では、接辞は判断ではなく非完了のものを用いる (59)。

(59) a ˉkʰo-ϕ ˉza ma-ϕ ˊlɛː-lə ˆma-reʔ
3-ABS ごはん-ABS 作る-NPFT.NEG
彼はごはんを作りません。

b ˉkʰo-ϕ ˉza ma-ϕ ˊlɛː-lə ˋʔə-reʔ
3-ABS ごはん-ABS 作る-NPFT.Q
彼はごはんを作りますか？

習慣についての不確実さを表すには、非完了/推量の接辞が用いられる。例については省略する。

継続の接辞は状態の継続を表す (60)。

(60) ˊŋa ⁻ʱɲiː-ϕ ˊta rɔ ⁻ʰtõ mo ⁻ʱzo-joʔ ˆma-reʔ
1 二-ABS まだ 結婚する-CONT.NEG
私たち２人はまだ結婚していないままです。

動作の進行中を表すには、進行の接辞を用いる (61, 62, 63)。

(61) a ˉkʰo-ϕ ˉza ma-ϕ ˆlɛː-ɕə jiː-tu
3-ABS ごはん-ABS 作る-PROG.SEN
彼は（今）ごはんを作っています。

b ˉkʰo-ϕ ˉza ma-ϕ ˆlɛː-ɕə meː-tu
3-ABS ごはん-ABS 作る-PROG.SEN
彼は（今）ごはんを作っていません。

(62) a ˊŋa-ϕ ˉza ma-ϕ ˊza-ɕə joʔ
1-ABS ごはん-ABS 食べる-PROG.E
私は（今）ごはんを食べています。

b ˊŋa-ϕ ˉza ma-ϕ ˊza-ɕə meʔ
1-ABS ごはん-ABS 食べる-PROG.E.NEG
私は（今）ごはんを食べていません。

(63) ˉkʰo-gə ˊta ʰta ˉza ma-ϕ ˆza-ɕə joʔ-lə ˋʔə-reʔ
3-ERG 今 ごはん-ABS 作る-PROG.Q
彼は今ごはんを作っているのですか？

発話者自身の動作・行為についても、たとえば夢で見た自身の描写については、進行/感知の

[48]「ぶたみたいな人」とは、食べては寝る生活スタイルの怠け者をさす。

接辞が用いられる (64)[49]。

(64) ˩ɦmə lɑ̃ ˊnɔ̃ tɕʰə-la ˊŋa-ϕ ˩kʰa ɦda ˊmɑ̃ ᵐbo-ϕ ˋʰɕɛʔ-ɕə jiː-tu
夢 中-LOC 1-ABS 話 多くの-ABS 話す-PROG.SEN
夢の中で、私はたくさんしゃべっていました。

疑問文には予測規則が適用される (65a)。(65b) については、「彼ら」が今何かをしているところを見ながら尋ねる疑問文である。

(65) a ˩tɕʰoʔ-ϕ ˩tɕə-ϕ ˋɦzo-ɕə joʔ
2-ABS 何-ABS する-PROG
あなたは（今）何をしているのですか？

b ˋtə tsʰo-gə ˋtɕə tə-ϕ ˆɦzo-ɕə jiː-tu
3.PL-ERG 何-ABS する-PROG.SEN
彼らは（今）何をしているのですか？

進行についての不確実さを表すには、/V-ɕə ˊjoʔ-sʰa reʔ/が用いられる (66)。感知の証拠性と不確実さを同時に示したい場合、/-pa/を用いる (67)。

(66) ˋkʰo-gə ˊtjɛ̃ sə-ϕ ˋʰta-ɕə ˊjoʔ-sʰa reʔ
3-ERG テレビ-ABS 見る-PROG.EPI
彼はおそらくテレビを見ているはずです。

(67) ˋkʰo-gə ˩za ma-ϕ ˊlɛː-ɕə jiː-tu-pa
3-ERG ごはん-ABS 作る-PROG.SEN-INFR
彼はたぶんごはんを作っているのでしょう。（キッチンからいいにおいがします）

疑念の強いことを表す場合、継続の形態を疑問形で表現する (48)[50]。

(68) ˋkʰo-ϕ ˩pʰaː ʰtɕɛʔ ˋʰtseʔ ˋʔə-joʔ-na
3-ABS たぶん 着く-PROG.Q-PART
彼はたぶん着いていないでしょう。

7.3 完了類

完了については、発話内容の動作を感知したか否かで接辞が選択される (69, 70)。

(69) a ˩kʰo-ϕ ˩za ma-ϕ ˆlɛː-tʰeː
3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.SEN
彼はごはんを作りました。（作った現場を目撃して）

b ˩kʰo-ϕ ˩za ma-ϕ ˆlɛː-kʰeː
3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.NSEN
彼はごはんを作りました。（作った現場は目撃していない）

[49] この発話の時点では夢から覚めているため、発話の内容は動作の過去の進行の描写となる。
[50] ただし、継続の疑問形とは形式が異なる。

(70) ˉkʰo-ϕ ˏʰsɑ̃ ʱlo ´ma-ʰtɔ̃-kʰeː
3-ABS 考える NEG-STEM-PFT.NSEN
彼は考えませんでした。

発話者自身の行為について、意図的でない行為を述べる場合、完了の接辞が用いられる (71, 72)。

(71) ˉʔa maː ˆŋa-gə ˉɕɑ̃ ljɔ-ϕ ˋtʰɑ̃ tɕeʔ ˋʱluʔ-tʰeː
INTJ 1-ERG 調味料-ABS すべて 入れる-PFT.SEN
あっ、私は調味料を（間違って）すべて入れてしまいました。

(72) ´ŋa tsʰo-ϕ ˏʱgo-ϕ ´ma-ʱdʑɛʔ-kʰeː
1.PL-ABS 門-ABS NEG-閉める-PFT.NSEN
私たちは門を（閉めるべきだったのに）閉めていませんでした。

発話者自身の行為について、意図的な行為を述べる場合、アオリストの接辞が選択される。向自己についての標示があるのが通例であるが、それを省略した形式もまた存在する (73)。

(73) a ´ŋa-ϕ ˉza ma-ϕ ˋza-zə
3-ABS ごはん-ABS 食べる-AOR
私はごはんを食べました。

b ´ŋa-ϕ ˉza ma-ϕ ˋza-zə jiː
3-ABS ごはん-ABS 食べる-AOR.E
私はごはんを食べたのです。

発話者自身の行為に関することでアオリスト/判断の接辞が選択されるのは、たとえば、仮定や条件を述べるときがある (74)。

(74) ˏʰpe-ϕ ˏʱʑɑʔ-na ˆŋa-gə ˉza ma-ϕ ˆlɛː-zə reʔ
例-ϕ 置く-CONJ 1-ERG ごはん-ABS 作る-AOR
たとえば、私がごはんを作ったとしましょう。

疑問形を用いて平叙文の意味を表す事例がある (75)[51]。

(75) ˋʔoː ´ⁿdoː sʰo-gə ˉza ma-tə-ϕ ˋtɕʰoʔ-gə ˆlɛː-zə ˋʔə-jiː
INTJ 昨晩-GEN ごはん-DEF-ABS 2-ERG 作る-AOR.E.Q
ああ、昨晩のごはんを作ったのはあなただったのですか。

不確実性の表現は、推量については/V-zə ´jiː-sʰa reʔ/が、推定については継続/推定の接辞/V-joʔ-sʰa reʔ/と同形となる (76)。

[51] これは Oisel (2017:98-99) にある ‘self-corrective’ という証拠性の形態に相当する。この用語は Tournadre & Sangda Dorje (1998) から用いられている。Lhagang 方言では、記憶違いの修正を疑問形で表す。

(76) a `k^{h}o-gə ¯za ma-ϕ ˆlɛː-zə ´jiː-s^{h}a reʔ
3-ERG ごはん-ABS 作る-AOR-EPI
彼は（きっと）ごはんを作ったでしょう。

b ¯k^{h}o-ϕ ¯za ma-ϕ ˆza-joʔ-s^{h}a reʔ
3-ERG ごはん-ABS 作る-CONT-EPI
彼は（きっと）ごはんを食べたでしょう。

確信度の高い推定については、継続/判断の接辞が使われることもある (77)。

(77) a `k^{h}o-gə ¯za ma-ϕ ˆlɛː-joʔ reʔ
3-ERG ごはん-ABS 作る-CONT
彼は（絶対に）ごはんを作ったでしょう。

b `k^{h}o-gə ¯za ma-ϕ ˆlɛː-joʔ ˆma-reʔ
3-ERG ごはん-ABS 作る-CONT.NEG
彼は（絶対に）ごはんを作らなかったでしょう。

あいまいな記憶に基づく発話については、小辞/-pa/が現れる (78)。

(78) ´^{n}dɔː s^{h}ɔ ´^{ɦ}gõ mo-tə ´ŋa-ϕ ´tjɛ̃ sə-ϕ ´ma-^{h}ta-zə-pa
昨日の夜-TOP 1-ABS テレビ-ABS NEG-見る-AOR-INFR
昨日の夜といえば、私はテレビを見なかったと思います。

8 まとめ

本稿は Lhagang 方言の動詞接辞が表す証拠性の体系について、述部を判断動詞、存在動詞、形容詞述語、内的感覚動詞、制御不可能動詞、制御可能動詞という６つのカテゴリーに分類して記述した。区別される証拠性の性質には、向自己、判断、感知、推量、推定などがあり、それぞれ個別の形態をもっている。制御不可能動詞と制御可能動詞については TA と証拠性が組み合わさって述部を形成する。これらに加え、感知による推量と知識による推定に個別の形式が認められる。

本稿で議論した体系を見渡せるように、以下表８および表９に、判断動詞・存在動詞と語彙的動詞に分けて、それぞれの平叙文肯定形の証拠性に関する形式ならびに接辞を表形式にまとめる。形容詞述語および内的感覚動詞については、ここでは提示しない。形容詞述語のうち、名詞的形容詞述語の各種証拠性の形態は判断動詞と酷似し、状態動詞的形容詞述語と内的感覚動詞は、TA と証拠性の兼ね合いおよび用いられる形式の点で大幅な制限があるものの、語彙的動詞と似た体系を見せる（表３、表４参照）。

表８：判断動詞と存在動詞における証拠性の形態のまとめ（平叙文肯定形）

動詞の種類	向自己	判断	感知	推量	推定
判断動詞	ˊjiː	ˊreʔ		ˊjiː-sʰa reʔ ˊjiː-ʱdʑɯ reʔ	ˊjiː-lə reʔ
存在動詞	ˊjoʔ	ˆjoʔ-reʔ	ˆjiː-tu	ˊjoʔ-sʰa reʔ ˊjoʔ-ʱdʑɯ reʔ	ˊjoʔ-lə reʔ

表８を見ると、判断動詞に感知を表す形態が認められないということが分かる。ただし、３節で述べたように、存在動詞の感知を表す形態における動詞語幹の部分は判断動詞の向自己を表す形態と共通する点に注目できる。

表９：動詞接辞における証拠性の形態のまとめ（平叙文肯定形）

TA	向自己	判断	感知	推量	推定
非完了	V-lə jiː V-liː	V-lə reʔ		V-sʰa reʔ	
未来	V-ʱgo	V-ʱgo reʔ	V-ʱgo ˆʰsɑ̃-ɕə ˊjiː-tu		V-ʱgo-sʰa reʔ
継続	V-joʔ	V-joʔ reʔ	V-jiː-tu	V-joʔ-sʰa reʔ	
進行	V-ɕə joʔ	V-ɕə joʔ reʔ	V-ɕə jiː-tu	V-ɕə joʔ-sʰa reʔ	
習慣		V-reʔ			
アオリスト	V-zə jiː	V-zə reʔ		V-zə ˊjiː-sʰa reʔ	V-joʔ-sʰa reʔ
完了		V-kʰeː	V-tʰeː		

表９を見ると、動詞接辞については、推量と推定の形態がアオリストを除き区別されない[52]。また、習慣には判断の形態のみがあり、完了は向自己と推量・推定の形態が認められず、一方非完了とアオリストには感知を表す形態が認められないことが分かる。習慣の体系について注意すべきは、内的感覚動詞につく感知の形態で、これが表９には現れていない。可能性として、習慣/感知の枠を占める可能性もある。また、完了/判断の形式は「判断」であるというよりはむしろ「非感知」であり、表９のようにまとめるのが言語事実に即しているかどうかは、詳細な検討を要する。

T 調査票も Oisel (2017) も、推量・推定を証拠性の枠組みに組み込んでいる。Lhagang 方言では、判断動詞と存在動詞の推定の形式（表８参照）が動詞接辞のの非完了/判断の形式（表９参照）と近い部分がある。Lhagang 方言では、この１点のみに共通性を認めることができたが、この記述の枠組みに基づくことで証拠性と認識の範疇の相互関係を明らかにできるといえる。

本稿ではすべての組み合わせについて例をあげることができなかったが、証拠性の枠組みをつかむことができるような資料を提供することを目的とした。今後は、否定形、疑問形も含め、助動詞、動詞連続の事例についてもより詳細な記述を目指したい。

[52] 未来/推定の枠に配置した形式は、未来/推量も兼ねる。未来/感知の形式が長いことに起因する便宜的措置である。

付録１：Lhagang 方言の音体系概要

声調

Lhagang 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の４種が認められる。

¯：高平　　´：上昇　　`：下降　　ˆ：上昇下降

母音

舌位置による一覧は次のようになる。

i　ʉ　ɯ　u
e　ə　o
ɛ　ɔ
a　ɑ

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している。

子音

初頭子音の主たる子音として現れる要素の一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前	硬口蓋 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	$ʈ^h$			k^h	
	無声無気	p	t	ʈ			k	ʔ
	有声	b	d	ɖ			g	
破擦音	無声有気		ts^h		$tɕ^h$			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		s^h		$ɕ^h$			
	無声無気	ɸ	s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z		ʑ		ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ȵ̊		ŋ̊	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w				j		

付録２：語釈における２通りの方式

記述形式	統合的語釈	分析的語釈
ˊmeʔ	EXV.NEG.E	EXV.NEG.E
ˊma-jiː-la	CPV.Q.NEG.E	NEG-CPV.E-Q
ˊmeʔ-lə-ˋʔə-jiː	EXV.NEG.Q.E	EXV.NEG-NPFT-Q-CPV.E
-ɕə-jiː-tu	-PROG.SEN	-PROG-EXV.SEN
-lə-ˊma-jiː	-NPFT.NEG.E	-NPFT-NEG-CPV.E
ˊma-V-zə-ˋʔə-reʔ	NEG-V-AOR.Q	NEG-V-AOR-Q-CPV

語釈における略号

語釈において、１つの形態素に複数の語釈が必要な場合、それぞれの語釈をピリオド (.) で区切って表す。接辞の一部には、形態論的には分析可能であるが複数の形態素をまとめて１つの語釈で表す場合もある点に注意されたい[53]。

1 ..... １人称
2 ..... ２人称
3 ..... ３人称
ABS ..... 絶対格
AOR ..... アオリスト
CIS ..... 向発話者
CONJ ..... 接続詞
CONT ..... 継続
CPV ..... 判断動詞
DAT ..... 与格
DEF ..... 定標識
E ..... 向自己
EPI ..... 認識
ERG ..... 能格
EXV ..... 存在動詞
FUT ..... 意思未来
GEN ..... 属格
HS ..... 伝聞
INE ..... 内格
INFR ..... 推量
INTJ ..... 間投詞
LOC ..... 位格
NDEF ..... 不定標識
NEG ..... 否定
NML ..... 名詞化
NPFT ..... 非完了
NSEN ..... 非感知
PART ..... 小辞
PFT ..... 完了
PL ..... 複数
PLN ..... 地名
PROG ..... 進行
PSN ..... 人名
Q ..... 疑問
SEN ..... 感知
STA ..... 判断
STEM ..... 動詞語幹
TOP ..... 主題

参考文献[54]

鈴木博之 (2016)〈試論東方藏區藏語土話的語法地圖：以判斷動詞與存在動詞為例〉甘于恩主編《從北方到南方：第三屆中國地理語言學国際學術研討會論文集》111-122 科學出版社

[53] この表し方は、鈴木ほか (2015) などで行っている方法とは異なる。

[54] 電子版が公開されているものについては、印刷物の有無にかかわらず URL を掲げる。いずれも最終閲覧日は 2018 年３月 14 日である。

鈴木博之、四郎翁姆 (2016)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』８, 21-90, 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/

—— (2017)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』——訳注と語りの特徴——」『言語記述論集』９, 23-42, 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000909/

鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015)「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注——塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて——」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』７, 111-140, 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000874/

星泉 (2003)『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

—— (2016)『古典チベット語文法：「王統明鏡史」(14 世紀) に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

星泉、ケルサン・タウワ (2017)『ニューエクスプレス　チベット語』白水社

Aikhenvald, Alexandra Y. (2015) *The Art of Grammar: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.

Gawne, Lauren & Nathan W. Hill (eds.) (2017) *Evidential Systems in Tibetan Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Kalsang, Jay Garfield, Margaret Speas & Jill de Villiers (2013) Direct evidentials, case, tense and aspect in Tibetan: evidence for a general theory of the semantics of evidential. *Natural Language & Linguistic Theory* 31.2: 517-561. [doi: 10.1007/s11049-013-9193-9]

Oisel, Guillaume (2017) Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16.2, 90-128. Online: https://escholarship.org/uc/item/9v08z3b4

Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan—. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet—New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34. Suita: National Museum of Ethnology. Online: http://hdl.handle.net/10502/4341

—— (2014) Brief introduction to the endangerment of Tibetic languages: special reference to the language situation in Eastern Tibetan cultural area. *The Journal of Linguistic Studies* Vol.19 No.3, 281-301.

—— (2016) *Typological description of existential verbs and expressions in the Tibetic languages spoken in the eastern Tibetosphere*. Paper presented at 4th Workshop on Sino-Tibetan Languages of Southwest China (Seattle)

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153-175. Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf

—— (2017a) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan: a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245, 63-90 [doi: 10.1515/ijsl-2017-0003]

—— (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163. Online: https://escholarship.org/uc/item/07b6q1vz

—— (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91.

Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Berlin: Walter de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263 [doi: 10.1075/ltba.37.2.04tou]

Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (1998) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*. Paris: L'Asiathèque.

Vokurková, Zuzana (2008) *Epistemic modalities in Spoken Standard Tibetan*. PhD dissertation, Univerzita Karlova and Université Paris 8. Online: https://is.cuni.cz/webapps/zzp/download/140032967

Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages: A Comparative Study*. Berlin: Mouton de Gruyter.

黄成龍 (2013)〈藏緬語存在類動詞的概念結構〉《民族語文》第２期 31-48.

張怡蓀主編 (1985)《藏漢大辭典》民族出版社

[付記]

本研究に際しては、次の援助を受けている：日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B)「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167、平成 25-28 年度）、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722、平成 28-29 年度）、平成 29 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774）。

Evidential system of verb predicates in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI　　Sonam Wangmo

This article presents the evidential system marked in predicates in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams; spoken in Lhagang Village, Dartsendo Municipality, Kandze Prefecture, Sichuan, China) principally following questionnaire elicitations. The description, based on the nature of predicates, consists of the following categories: copulative verbs, existential verbs, adjectival predicates, endopathic verbs, non-controllable verbs, and controllable verbs. Lhagang Tibetan has following principal evidential features: egophoric, statement, sensory, sensory inferential, and epistemic inferential.

The evidential system of Lhagang Tibetan is summarised as follows:

Copulative and existential verbs

verb type	egophoric	statement	sensory	sensory inferential	logical inferential
copulative	ˊjiː	ˊreʔ		ˊjiː-s^{h}a reʔ ˊjiː-^{ɦ}dʑɯ reʔ	ˊjiː-lə reʔ
existential	ˊjoʔ	ˆjoʔ-reʔ	ˆjiː-tu	ˊjoʔ-s^{h}a reʔ ˊjoʔ-^{ɦ}dʑɯ reʔ	ˊjoʔ-lə reʔ

Suffixes for lexical verbs

TA	egophoric	statement	sensory	sensory inferential	logical inferential
nonperfect	V-lə jiː V-liː	V-lə reʔ		V-s^{h}a reʔ	
future	V-^{ɦ}go	V-^{ɦ}go reʔ	V-^{ɦ}go ˆ^{h}sɑ̃-ɕə ˊjiː-tu		V-^{ɦ}go-s^{h}a reʔ
continuant	V-joʔ	V-joʔ reʔ	V-jiː-tu	V-joʔ-s^{h}a reʔ	
progressive	V-ɕə joʔ	V-ɕə joʔ reʔ	V-ɕə jiː-tu	V-ɕə joʔ-s^{h}a reʔ	
habitual		V-reʔ			
aorist	V-zə jiː	V-zə reʔ		V-zə ˊjiː-s^{h}a reʔ	V-joʔ-s^{h}a reʔ
perfect		V-k^{h}eː	V-t^{h}eː		

受理日　2018 年 4 月 2 日